

「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園」*
——ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ——

ジャン=ピエール・デュピュイ

私の講演は悪=厄災をめぐる考察ですが、それは私の視点、すなわち西洋と呼ばれる地域の文化と思想の視点からおこなわれることになるでしょう。西洋哲学の歴史は、悪=厄災の問題をめぐる絶え間ない対話だとも言われ、私もその見解を少なからず共有しています。¹

このたび日本は大きな悲劇にみまわれました。そのようなときに日本のみなさんに以下の考察を聞いていただくのは大いなる名誉であり、お役に立てるならば大きな喜びでもあります。私の同国人で文学批評家のロラン・バルトは、かつて『表徴の帝国』²という壮麗な著作を日本文化に捧げました。それを読んでいた私は、2011年3月11日の大震災のあと、日本のみなさんの心が、象徴的な次元で、フクシマとヒロシマを関連させて考えるに違いないと予想していました。事実その後、カタルーニャ国際賞を受賞した際に作家の村上春樹が原子力利用を批判し、フクシマ原発の事故を彼の国が受けた「二度目の大きな核の被害」と形容しています。フクシマは、いわばヒロシマの余震だと言わんかのよう。

西洋の人間にとって、両者を関連づけることには何かしらスキャンダラスに思えます。しかし、より深く考えると、漠然と自分たちにも馴染みのある考え方のようにも思えます。このきわめて重要な点に光をもたらすために、18世紀以降の西洋における悪=厄災の思想を手短にたどってみましょう。

1. 悪=厄災の問題とは何か？

* 2011年6月30日、東京大学駒場キャンパスにおける講演。主催：科学研究費補助金基盤研究（B）「共生の宗教へむけて——政教分離の諸相とイスラーム的視点をめぐる地域文化研究」；東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」（UTCP）

¹ Susan Neiman, *Evil in Modern Thought : An Alternative History of Philosophy*, Princeton University Press, 2004; Jean-Pierre Dupuy, *Petite métaphysique des tsunamis*, Paris, Seuil, 2005.

² Roland Barthes, *L'Empire des signes*, Paris, Skyra, 1970.

西洋において、死・病・事故といったものが、*summum bonum*、すなわち至高善の原則によって、神が罪を犯した人間に対して下した正当な罰だと考えられていた時代がありました。神は物理的な厄災の原因だったわけですが、それに加えて、神は罪や道徳的な悪の原因でもあるのかという問いが立てられました。かりにそうであるならば、自分自身の創造物を損なうものを神が発明したことをどうやって正当化することができるのか、というわけです。神を正当化しようとする行為を、ギリシャ語で「テオディケー（弁神論）」と言います。テオディケーは、神の完璧な創造行為によって生み出されたはずの世界に悪が存在するというスキャンダルに意味を与えようとする人間の試みであり、そうした試みの一切を指す語として哲学的伝統のなかで用いられてきました。この難問に対する答えとして長いあいだ満足すべきものとされてきたのは、アウグスティヌスの解答でした。それは次のようなものです。神は道徳的な悪を欲したわけではないが、それを許容する以外に道はなかった。なぜなら、神自身の似姿に作られた人間は、自由な存在として、すなわち悪を選ぶ自由も具えた存在として創造されたからである。

アウグスティヌスのこのテーゼは、数多くの思想家によって攻撃されてきました。最も手厳しい攻撃は、カルヴァン主義者で、『歴史批評事典』（1695年 - 1697年）という膨大な書物を著したピエール・ベールからの攻撃です。敵に贈り物をするとき、最も簡単にできるのは敵の破滅をもたらすものを贈ることだ。こう、ベールという恐るべき論客は揶揄しました。そのベールからアウグスティヌスの議論を救い出したのは、ドイツの哲学者にして数学者であるライプニッツでした。それは、彼の形而上学の二本の柱である著作で展開されています。最初の著作は、1710年に刊行され、まさしく『弁神論』と題された著作であり、第二の著作はその4年後に刊行された『モノドロジー（単子論）』です。

ライプニッツの弁神論は次のように要約することができます。神は、彼の悟性のなかに無限数の可能な世界を持っていた。彼はその中からひとつを選び、それに実在を与えた。その選択は、(いかなる効果にも原因があるという)充足理由の原理ゆえに、恣意的な選択ではありえなかった。存在しうるのは最大の完璧さを有するもののみだという原理ゆえに、神は最善の世界を選ぶ以外になかった、というわけです。では、神には別の選択をする自由がなかったのか。そうではなく、神の選択を導いた必然性は単に道徳的なものであって、形而上学的なものではなかった。(つまり、神が最善の世界以外の世界を選ぶことに論理的な矛盾はないという意味で形而上学的なものではなかった。)ところが、可能な最善の世界を実現するために、神は一定量の悪を残さなければならなかった。さもなければ全体として世界はより悪いものになっていたからだ。個々のモノドから見ると悪に映るものはすべて、全体から見ると全体をより良いものにするために〈必要な犠牲〉だった。したがって、悪に見えるのは単なる錯覚であり、神と人間とのあいだの遠近法の違いの結果にすぎ

ない、というのです。

しかし、「楽天主義」と評されるライプニッツのこの学説は、1755年11月1日にこっぴみじんに粉碎されてしまいます。東日本大震災と同等のマグニチュードをもつ大地震が起きてポルトガルの首都に巨大な火災をもたらし、モロッコ沿岸にも及んだ15メートルもの高さの津波が襲ってリスボンは瓦礫に帰ってしまったのです。そこから、悪=厄災をめぐる2つの哲学的態度が出てきました。便宜上、ヴォルテールとルソーという、2つの固有名詞に結びつけておきましょう。ヴォルテールは、1756年3月に『リスボンの災害についての詩』という哲学的な詩をおおやけにし、それをルソーが、1756年8月18日付の『ヴォルテール氏への手紙』で反駁しました。

ヴォルテールは、「ポストモダン」と形容したくなるような態度で、われわれは出来事の純粋な偶発性を認めなければならず、けっして原因と結果の連鎖を知ることがないという事実を受け入れなければならないと要求しています。ルソーの方はというと、次の二つの事柄が確実だと述べています。罪を犯した人間を罰するのは神ではないということ。そして、人間を襲う不幸の原因と結果の連鎖については人間的な説明、ほとんど科学的な説明を見つめることができるということ、です。1762年の著作『エミール』において、彼はリスボンの惨事からの教訓を引き出しています。「人間よ、もはや悪=厄災をもたらす者をもうさがすことはない。悪=厄災をもたらす者、それはお前なのだ。お前がおこなっている悪=厄、あるいはお前が悩まされている悪=厄災のほかには悪=厄災は存在しないし、それらの悪=厄災はいずれもお前自身から生まれるのだ。」ⁱ

西洋においてルソー的見方が優勢であることは、フクシマ以前に近年に起こった大規模な自然災害、ハリケーン・カトリーナと2004年クリスマススマトラ沖地震による津波への反応から明らかです。そこで疑問視されたのは、まさしく自然のカタストロフィーという性格でした。『ニューヨーク・タイムズ』は、ハリケーン・カトリーナについて“**A Man-madeⁱⁱ Disaster**” (人間による災害) という見出しをつけました。東南アジアの津波についても同じことが言われましたが、それにもそれなりの理由がありました。都市化、観光、魚介類の養殖、気候温暖化によってタイの珊瑚礁とマングローブが無残に破壊されていなかったならば、人々の命を奪った波の侵入を防ぎ、有意義な形で被害の増大を防ぐことができただろう、というわけです。ニューオーリーズについては、何年も前から防波堤の補修を怠っており、救援活動をすべきルイジアナの州兵はイラクへと駆り出されてしまったためにいなかった、ということが判明しました。そもそも、あんなに危険な場所に都市を造ることを考えたのは誰だったのか、という問いも出ました。東日本大震災についても、日本は絶対に商業核に乗り出すべきではなかった。なぜなら、日本の地理的条件からして、地震が多発し、津波の危険がある地帯に原発を建設する以外にないからだ、と

いう声がすでに聞かれます。というわけで、西洋的な見方からすると、人間を襲う不幸、その犯人ではないにせよ責任者であるのはほからならぬ人間であり、ただひとり人間なのだ、ということになります。

ルソー的な考えを完全に逆転させた、悪=厄災に関する別の考え方が西洋に広がるには、20世紀の大規模な道徳上の惨禍を待たなければなりません。哲学者のヴラディミール・ジャンケレヴィッチによれば、ルソー的考え方は $\dot{\text{A}}\text{ntropodikt}$ 、すなわち Teodikt （弁神論）の構造を持ちながら人間が神に取って代わった「弁人論」だということです。しかしいまや、あらためて神や自然が証人として語るよう求められるようになりました。それを評して、 $\langle \text{悪}=\text{厄災} \rangle$ の自然化と言う人さえいます。

2. 新たな悪=厄災の体制、あるいは諸々の差異の抹消

1958年に、ドイツの哲学者ギュンター・アンダースは広島と長崎におもむき、第4回原水爆禁止世界大会に参加しました。彼は旅のあいだずっと日記をつけていました。原爆というカタストロフィーを生き延びた人々と何回ものやりとりをしたあと、彼は次のように記しています。「彼らはけっして原爆投下の犯人を話題にせず、その出来事が人間によって起こされたものであることを語らない。最悪の犯罪の被害者であるにもかかわらず、わずかのルサンチマンすら持っていない。それは私には信じられないことであり、私の理解を超えている。」さらに彼は付け加えます。「そのカタストロフィーについて、彼らはつねに地震か、隕石の落下か、津波であるかのように語る。」ⁱⁱⁱ

彼の学友であり、妻でもあったハンナ・アーレントとはほぼ同時期に、アンダースは新しい悪=厄災に関する考え方を見きわめようと試みていました。アーレントはアウシュヴィッツについて語り、アンダースはヒロシマについて語っていました。アーレントは、アイヒマンが持っていた心理学的障害とは「想像力の欠如」であるという診断を下していました^{iv}。アンダースは、問題はひとりの人間の障害ではなく、すべての人間がもつ $\langle \text{何かをおこなう力} \rangle$ 、破壊することを含んだおこなう力であって、それが人間の条件に不釣り合いなまでに肥大することこそ問題であることを示しました。その時、悪=厄災は、それをおこなう者の意図から離れ、自律するのです。アンダースとアーレントは、まったく悪意が存在しなくても悪はおこなうというスキュンダル、まったく悪意がなくても途方もない責任が生じうるという点を指し示していました。われわれが持つ〈道徳〉という範疇は、悪が想像可能な範囲を超えてしまうと、悪を描写したり裁いたりできなくなってしまいます。そして、次のように述べる以外になくなってしまふのです。「大きな犯罪は自然を害い、そのために地球全体が報復を叫ぶ。悪は自然の調和を見だし、罰のみがその調和を回復する

ことができる」^vと。ヨーロッパのユダヤ人たちは、「ホロコースト」という語の代わりに「ショアー」という語を用いるようになりました。「ショアー」は、自然のカタストロフィーという意味であり、とりわけ津波という意味ですが、この変更は、自分たちが被害者であったり責任者であったりする事柄が思考の域を超えてしまうと、悪=厄災を自然のものとしたくなる。そうした誘惑を示しているのです。

アウシュヴィッツもヒロシマも津波なのでしょう。運命の皮肉ですが、フクシマで核という虎を目覚めさせたのは、本物の津波、これ以上ありえないような物質性を持った波でした。フクシマの核は檻に入れられた虎でした。原子炉は原子爆弾ではありません。原子炉とは、みずから起こした連鎖反応を制御する装置なので、ある意味で原子爆弾の否定形とも言えるでしょう。とはいえ、言語や思考という象徴的な領域において、否認はみずから否認している当のものの存在を肯定するのです。たとえば、「チェルノブイリはヒロシマとはまったく関係がない」と言うとき、われわれは関係性を否定する当のものを関連づけています。そのうえ現実でも、まさにわれわれが置かれた状況ですが、虎が檻から逃げ出すということもありうるのです。

このたびのドラマのかなりの部分は、象徴の舞台と想像的なものの舞台で演じられています。あたかも自然が人間に対して立ち上がり、15メートルの高さの砕け波の上から見下ろして次のように言ったかのように。「お前は、お前の内に住まっている悪を隠そうとして、それを私の暴力だと言っている。しかし私の暴力は純粹であり、善悪という範疇の手前にあるものだ。お前は自分が作った死の道具と私の無垢な力を同じものだと考えている。その言葉尻を捉えてお前を罰してやろう。津波で滅びるがよい！」

今回、最初に避難した地域のなかに、マリアナ諸島があります。テニアン島は諸島のなかにある島のひとつですが、1945年8月6日の早朝、広島を粉碎し、放射能で覆い尽くし、その3日後長崎に対しても同じことをしたB29の編隊が飛び立った地でもあります。神聖な炎^{vi}を収容するという罪を犯したちっぽけな土地、この行為に対して復讐するかのよう、巨大な波はその島々にも向かいました。

私は西洋の哲学者だと言うときの「西洋」とは西洋文化という意味であって必ずしもキリスト教的という意味ではありません。しかし、そうした西洋の哲学者である私にとっても、この記号の反転のなかに、つまり自然のカタストロフィーと道徳的カタストロフィーの差異をあいまいにするしぐさのなかに、聖書の最後の部分に収録された預言の例示が見いだされるように思われます。私の言いたいのは、使徒ヨハネに帰せられている黙示録のことです。時の終わりに関する啓示³は、〈人間によってもたらされた混沌〉と〈自然の暴力〉

³ 黙示録を意味するギリシャ語 *apocalypsis* は、「啓示」という意味である。

との区別の消滅、さまざまな徴の喪失、象徴の崩壊というかたちで現れます。西洋がフクシマを見て覚える恐怖は、深く宗教的なルーツを持っているのです。

とはいえ、フクシマは工業的・技術的カストロフィーでもあります。西洋が取り上げたのはもっぱらこちらの側面ですが、それは西洋の経済発展モデルが生き延びられるかどうか賭けられているからにはほかなりません。気候の温暖化と化石燃料の枯渇という万力のなかに挟まれた西洋は、核エネルギーが救済の道を開くことを期待していました。フクシマは、その希望の弔鐘となったかもしれません。

諸々の差異の消失は、単に道徳的カストロフィーであるヒロシマと自然のカストロフィーである津波のあいだで起こっているだけでなく、道徳的カストロフィーであるヒロシマと工業的・技術的カストロフィーであるフクシマのあいだでも起こっています。前者ヒロシマの場合、悪=厄災は危害を加えようという意図に由来します。後者フクシマの場合、悪=厄災は善をなそうという意図に由来します。善が悪に転じるという悲劇的な逆転、工業社会に対する偉大な批判者であったイヴァン・イリイチ（1926年－2002年）は、その逆転を反生産性と呼んでいました。彼は、今日、最も大きな脅威は悪人から来るのではなく、善を自指す工業界から来ると主張しました。悪意のある人々よりも、国際原子力機関（IAEA）のように、「全世界の平和、健康、繁栄」を保障する使命をもった組織こそ恐れるべきだというわけです。反原発派の人々は、戦うからには敵を〈きわめて腹黒い人々〉として描き出す必要があると考えていますが、その態度がかえって批判の力を弱めていることに気づいていません。われわれを脅かす巨大組織の人々が有能かつ誠実な人々であることの方がはるかに深刻なことなのです。その人々は、なぜ自分たちが非難されるのか理解できないわけですから。

悪=厄災は、それをもたらす人々の意図から自律しているということ、それが悪=厄災をめぐる私の考察の中心テーマです。キリスト教に浸透された西洋文化にとって、伝統的に、悪が存在するとされたのは、悪をおこなう意図が認められたときだけでした。しかし私は、自分の仕事を通じて、ヒロシマ・ナガサキへの原爆によって開かれた核抑止のシステムは、伝統的な考え方の放棄を背景にしてしか理解できないことを示しました。MAD（Mutually Assured Destruction、相互確証破壊）という、まさにぴったりの名を授けられたゲーム。この狂気の頂点は西洋的理性の頂点でもあるのですが、そこで対決するアメリカとソ連という双子の暴力が現実の行為へと移るのを抑止するのに必要だったのは、ある虚構の存在でした。それは、奇妙な否定的協力関係のなかで双子が作り上げた、超越的な第三者であり、悪意を持たぬ、しかしいつでも彼らを歯牙にかけて引き裂くことができる、核の「虎」という第三者です。この象徴的な「虎」は、双子の暴力が外化され物象化されたものにほかなりません。それは、双子を脅かすと同時に彼らを守ります。本日の講演のタイトルに、

私はギュンター・アンダースの驚くべき言葉を引っ張ってきました。それは「憎悪の終わり」を告げているので、一見よき知らせ、「福音」をもたらしているように見えます。しかしその憎悪の終わりは、愛を告げるキリスト教的な福音ではなく、その反対物でさえあるのです。事実アンダースはこう書いています。「われわれのせいで黙示録的な脅威にさらされているのに、世界は悪意なき殺人者と憎悪なき被害者が仲よく住む楽園の姿をまとう。そこには一欠片の悪意も見当たらず、あるのは見渡すかぎりの瓦礫ばかりである。」^{vii}

3. チェルノブイリの教訓

この新たな悪=厄災の体制の例を示し、それが人間というアクターの意図から切り離されていることを示すために、おおぜいの人々が長期にわたって低い放射線量にさらされたらどうなるかという問題を取り上げたいと思います。大いに物議を醸している問題です。チェルノブイリ原発の事故による死者と病人の数をめぐる議論に重くつきまどってきた問題であり、フクシマのカタストロフィーでもあらためて提起されつつある問題です。

チェルノブイリによる死者は 40 人から 40 万人であるという、途方もなく異なった数字が、さまざまな鑑定者によって提示されました。いずれも真面目な評価結果なのですが、ここまで数字が異なるのは、「低線量」の問題をめぐる根本的な意見の不一致のためです。この分野における客観的・科学的真実はどこにあるのでしょうか。

以上のような仕方で問いを立てること、それは倫理的、法律的といった他の規範から切り離された形で科学的な評価をおこないうることを前提としています。ですが、少なくともこの問題については、これらを切り離すことはできないというのが私の意見です。

それを示すためには、1986 年 8 月 26 日に起こったカタストロフィーの教訓を引き出すために結成された、国連による国際的な機関、チェルノブイリ・フォーラムの結論を分析すれば事足りるでしょう⁴。フォーラムのために、物理学者、生物学者、医師、経済学者など 100 名あまりの専門家が作業をしました。彼らは、全員一致で最終的な科学的真実だとする結論にたどりつきました。彼らは、科学的真実以外にも「人間的」、「社会学的」、「心理学的」などと彼らが呼ぶ真実が存在することを認めています。しかしこの譲歩は、科学的客観性という価値をそれ以外のものから守る効果を持つものです。ところが、カタス

⁴ チェルノブイリ・フォーラムは、国際原子力機関の要請のもとに、チェルノブイリにおける惨事の結果を評価するために 2002 年に作られた。フォーラムは、世界保健機関 (WHO)、国連環境計画、世界銀行、国連放射線影響調査科学委員会、そして国際原子力機関自身など、国連に属する 8 つの国際機関、さらにはロシア、ウクライナ、白ロシアの各政府からなっていた。

トロフィー一般において、そしてチェルノブイリという事例において、科学的評価という、他から切り離された分野が存在するかどうかは疑わしいのです。そもそも科学的評価という表現自体が、自己矛盾を起こしているように思われます。こと〈価値〉の分野において、科学のみをもってしては何も言うことができないからです。

2001年にある専門家がこう言いました。「チェルノブイリ事故が原因で31名の死者が出た。それは、200シーベルトという線量を浴びたことによるもので、それに加えて容易に治療可能な甲状腺癌が2000人の子どもに出た。今日まで、チェルノブイリ事故の被曝によって公衆衛生に影響が出たという証拠、国際的に認められた証拠は存在しない。この『被曝によって』という点を強調しておきたい。」⁵ 被曝の因果的帰結という観念を強調する理由は、公式テーゼが原発事故による相当の「社会的 - 心理学的帰結」を否定してはいないという点から説明することができます。数万人の死者ではなく数十人の死者しか出なかったと主張する人々も、チェルノブイリが今日知られているうちで最大の核カストロフィーであることを、認めることにやぶさかではありません。こうした見解にはいくつもの矛盾があるように見えますが、その迷路のなかでどのような道をたどればよいのでしょうか。

〈公式テーゼ〉の暗黙の弁証法には、以下の3つの段階があります。

1) チェルノブイリのカストロフィーは、(ヒロシマの何百倍にも達する)大量の放射能を発生させた。しかし、放射線被曝による帰結は、センセーショナルなメディアが恐れ、予告し、言いふらしたものに較べると、比較にならないほど小さかった。科学的客観性に基づいて、この点は強く主張されなければならない。

2) 当事者となった人々は事実深刻な影響を受けたには違いない。しかしそれはひとえに、先の第1の点について無知であった人々が、深刻な影響を受けたと信じたからである。

チェルノブイリ・フォーラムの報告書は、さまざまな工夫を凝らして、(人々が現実に深刻な被害を受けたという)この第2の点を説明するいくつかのメカニズムを提示していますが、それらは推測の域を出ないものです。報告書があげるのは、以下のようなメカニズムです。まず身体的なメカニズム。汚染された地域に観察される奇妙な病理は、ストレスや不安によって引き起こされることもある。心理学的なメカニズム。住民たちは、放射能によって障害が生じるということが自分たちの逃れられぬ運命と信じるあまり、注意や治療をおこたってしまい、症状が出るとすべて放射能のせいにしてしまう。同様に、一部の地域で出生率が大きく減少し、人工中絶が増えたことの原因は、ひとえに将来に対する恐

⁵ 2001年6月にキエフでおこなわれた世界保健機関の会見(?)で国際原子力機関の代表者たちによって発せられた言葉。

れに帰せられるべきである。さらにまた、一部の地域で住民が移住した結果、その地域の平均年齢が大幅に上昇した。そのために死亡率が増加したが、それも原発事故に帰せられてしまった。先天的畸形の増加については、以前よりも注意深くそれを発見しようと務めた結果にすぎない。社会的なメカニズム。地域の当局が抱く良心の呵責のせいで、また潜在的な被害をこうむった人々の食欲さもしくは復讐心理のせいで、補償を得る人の数、つまりカタストロフィーの被害者だと自負する人の数が年々増加している、というわけです。

1) 第3の点は上の2点から派生したものです。1) で言われた、客観的真実と自己実現的信念とのあいだの格差を生み出すメカニズムを打ち破るためには、人々に情報を提供し、コミュニケーションをおこない、教育をしなければならない。人々が放射能とともに生きることができるように、放射能を飼い慣らし、不安から自由にならなければならない。高速道路という危険な空間にも、いくつかの単純で、あまり自由を奪うことのないルールを守ることによって、さほど恐れずに身を置くことができる。それと同じだ、というわけです。

この〈公式の真実〉は、数多くの異議申し立ての対象となりましたし、今日でも対象となり続けています。2006年4月、事故の20周年を受けて刊行されたNature誌の特集号が次のような結論を述べています。「史上最悪の原発事故がもたらした諸結果に関して完全に独立した研究が世界規模でおこなわれ、誰にでも理解でき、正確な考え方を持てるような形で公にされないかぎり、核産業に対して公衆がいただく警戒心はたえず増大するであろう。」^{viii}この警告が聴き取られることはなかったようです。そして、脱原子力が相次いで表明されるのを見るに、フクシマの事故は溢れんばかりだった不安を氾濫させた水の一滴、という役割を持ったことになるでしょう。

ところで、人間の健康に対する核カタストロフィーの影響は、原則として3つの方法によって評価されます。直接的な観察、疫学的な調査、モデル化の3つです。ごく初期の作業員たちは、チェルノブイリできわめて高い線量を浴びたので、彼らの死は確実に原発事故によるものとすることができます。その後、中レベルの、もしくは低レベルの放射線に被曝したすべての人々について、事情ははるかに複雑です。原則として、一定の時間を経たおこなわれた疫学的な調査は、通常の比率に較べてどのていど悪性の病気が増加したかという評価を可能にしてくれます。しかし、チェルノブイリの場合は、そうした調査をしっかりとこなうことはできませんでした。それは、2つの理由によります。最も被曝量が多かった人々——リクビダートル（事故処理班）と移住を余儀なくされた人々——は、ソビエト全土に散らばってしまい、まともな追跡調査をすることができませんでした。他方で、低線量被曝の何百万もの人々について疫学的調査をおこなったならば、白血病や癌による死者数のわずかな、もしくはごくわずかな増加を発見できたはずでした。しかしそのために

は莫大な手段を投入しなければならず、解体に瀕していた当時のソビエトにそれはできませんでした。というわけで、モデル化が疫学的調査の代役を果たすことになりました。将来の死者数を推計するために頼らなければならないのも、この同じモデル化でした。

放射線防護の国際機関によって採用されたのは、「限界値のない」モデルでした。したがって、わずかな線量であっても、線量に比例して病気や死亡の確率が上がると想定されていました。別の言い方をすると、それ以下であるならば放射線の影響がゼロとなる最低値は存在しないということです。国際機関は、慎重を期してこのような仮説を立ててしていると説明しました。そこから現実の影響よりも大きい値が出てくるからだ、というわけです。残念ながらすでに故人となったノーベル物理学賞受賞者のジョルジュ・シャルパックは、次のような論法を用いてそれに科学的な土台を与えようとしていました。細胞の新陳代謝に対する放射線の影響は、ある人口の 20% の死因となっている「自然」の癌をもたらす、組織に内発的なアクシデント同じである。放射線による癌と通常の癌を区別するものは何もない。低レベルの放射線の影響は癌を引き起こす他の原因に較べてマージナルなものなので、放射線による癌の増加は、たとえ非常な低レベルであっても放射線量に比例すると見なすことができる。これこそが計算式の基礎となる考え方でした。

私はここで、このモデルを正当化しようとも批判しようとも考えてはいません。それは私が扱いたい問題ではないからです。私の問いは、そのモデルを採用した結果どのようなことが起こったかというものです。

チェルノブイリ・フォーラムの報告書は、最終的な数字として死者 4000 名と記しています。しかし注意深く読むと、先の「限界値のない」モデルによる計算の対象となっているのは、世界中で被曝した人々という集団のごく一部にすぎないことがわかります。わずか 60 万人。処理班 20 万人、移住者 12 万人、そして最も汚染された地域の住民 27 万人です。それ以外にも存在する何百万人もの被曝した人々について、公式の評価はまったく触れていません。これが意味しているのは、その人々が死んでも原発事故はその死に対していかなる責任も持っていないということだ、とたいていは理解されています。しかし、いつその整合性を求めてその人々についても「限界値のない」モデルを適用すると、死者数千人という数字ではなく、ジョルジュ・シャルパックがはじき出したように数万人という数字が出てくるのです。

いったい何が起こったのでしょうか。放射線が長期にわたって膨大な人口を汚染するとき、癌または白血病で死亡した誰それがチェルノブイリのせいで死んだとは言えなくなってしまうということです。せいぜい言えるのは、その人がアプリアリに持っていた癌や白血病で死亡する確率が、チェルノブイリのせいでごくわずかに増加したということだけで

す。「限界値のない」線形モデルが原発事故で死ぬことになるとしている 3 万ないし 4 万の死者、彼らを名指すことはしたがってできません。だから公式テーゼは、彼らの死は存在しないと結論づけるのです。ここに見られるのは、きわめて特殊な〈死体の山の隠蔽〉です。そしてこの地点でこそ、科学的評価なるものが、倫理的さらには形而上学的な態度決定と切り離しえないことが明らかになるのです。

この議論の背後に隠れている深遠な哲学問題は、20 世紀の道徳哲学が生んだ最も重要かつ影響力のある著作のひとつで正面切って論じられています。それは、イギリスの哲学者デレク・パーフィットの『理由と人格』という本です⁶。この本は、チェルノブイリ事故の 2 年前の 1984 年に刊行されました。パーフィットは、「道徳数学における 5 つの誤り」の名のもとに、予知能力を持っているのではないかと疑わせるような正確さでもって、まもなく核カタストロフィーや放射線防護の専門家たちが採用することになった論理を分解して見せています。

重要な効果をもたらす可能性がきわめて低い行為や出来事というものが存在します。それらがほとんど無意味だという理由で、道徳的または理性的な計算がそれらを存在しないものと扱ってよいのでしょうか。ほとんど知覚不可能な効果しかもたらさない一方で、おおぜいの人々に関わってくる行為や出来事があります。効果が知覚できないということで、考慮に入れるのを断念すべきでしょうか。これらの問いに肯定的に答えると、すぐさま連鎖式のパラドクスの数ある形のひとつに打ちあたることになるでしょう。連鎖式のパラドクス（字義どおりには堆積物のパラドクス）は紀元前 4 世紀から知られています。禿頭に移植された一本の髪の毛はその人物を禿頭ではない人物に変えることはない。禿頭でない人とは一定数の髪の毛を生やしている人であるにもかかわらず、というものです^{ix}。

二人の候補者のあいだで争われる全国規模の選挙、あるいは二者択一の国民投票があったとしましょう。ほとんど想像できないケース、2 つの選択肢に均等に票が集まるという（10 億分の 1 ぐらいしかないような）ケースを除いて、それぞれの選挙人が投票箱に入れた一票の効果はほとんど無に等しいと言えます。「違う方に投票していたら、（あるいは投票をおこなっていなかったら）結果は違ったか」という問いに対しては、「そんなことはない」という答えが返ってくるはずです。投票の結果が票の数に直接由来するにもかかわらず、それが答えとなるのです。しかし、どうやってこのパラドクスを解消するかということもわれわれは知っています。このような状況でわれわれがよく自然におこなうように、象徴的思考に訴えればよいのです。われわれは、接戦であるときは特に、こうした投票の結果を人民とか選挙民といった集合的な主体が、注意深く熟慮した結果だとして解釈します。

⁶ Derek Parfit, *Reasons and Persons*, Oxford, Clarendon Press, 1984. [訳注:「道徳数学の 5 つの誤り」は、この著作の第 3 章。]

狭い意味での理性の観点からすると、こうして助っ人として持ち出す集合的主体は純然たるフィクションにすぎません。しかしそれは、責任の問題という道徳的次元のパラドクスを解消してくれるのです。

1991年、欧州連合の規則を決めたマーストリヒト条約はフランスで可決されましたが、その差はごくわずかなものでした。それを受けて次のような論評がありました。「賢明なフランス国民はヨーロッパ連合に『ウイ』と言った。しかし同時に、統合のプロセスを加速しようとする人々に警告も送った。」このような言い方に正当性があるとするならば、次のような言い方もそれに劣らず正当ではないでしょうか。「チェルノブイリのカタストロフィーは、何万人もの死に責任がある。」いずれにせよ、この例から、客観的評価なるものが、道徳的次元の考察を避けて通ることができないことがわかるはずです⁷。

原子力関連の国際機関に対してどのような批判ができるでしょうか。私は、そこで働くのは有能かつ誠実な人々だと賭けてもいいと思います。私は（彼らが有能かつ誠実であるという）仮説を、私の本『チェルノブイリから帰って——怒れる男の日記』で述べています⁸。そのせいで、私の国の反原発派の人々から、殺すという脅しを受けました。彼らに理解できなかったのは、この仮説こそ現在の状況を最大限重視する仮説だということです。われわれを統治する人々の〈意図〉など重要ではありません。重要なのは状況です。今日、商業核の責任者は、次のような精神を持っていなければなりません。倫理的な問いを別の領域に追いやり、最終的には二次的な領域に追いやるという精神です。核を扱う人々の悪意ではなく、この構造こそ悪=厄災の主要な源にほかならないのです。

パリから東京へ来る飛行機のなかで、完璧なまでにフランス語をあやつる日本人教授による、とても興味深い本を読みました。その本を直接フランス語で書いた人物は中川久定といい、本のタイトルは『日本文化入門：相互的人間学試論』⁹でした。著者は丸山真男のテーゼを解説しているのですが、そのテーゼとは、日本文化と西洋文化のあいだの大きな違いは前者が状況に根本的な役割を与え、状況が個人の意志を左右するのに対して、西洋文化においては個人が歴史の流れに介入すべくイニシアティブを取るというものです。ルソーとサルトルがよく理解したように、西洋では人間が神の座を占めにきて、弁神論は弁

⁷ 実証主義と科学主義とのあいだの古典的な区別を喚起しておく。実証主義は、科学的評価の基準が他の基準から切り離されたものでありうることを認める。科学主義は、科学的評価の基準以外の評価がありうることを否定する。核に関する評価は実証主義的であり、科学主義的ではない。

⁸ Jean-Pierre Dupuy, *Retour de Tchernobyl. Journal d'un homme en colère*, Paris, Seuil, 2006.

⁹ Hisayasu Nakagawa, *Introduction à la culture japonaise. Essai d'anthropologie réciproque*, Paris, P.U.F., 2005.

人論となるというわけです。西洋から見ると日本的な世界観が特異であることを示すために、中川久定は、1941年12月8日に昭和天皇が発した宣戦の詔を引用しています。「今や不幸にして米英兩國と鼻端を開くに至る、洵に已むを得ざるものあり。豈朕が志ならむや。」

もしかすると、とても長大な回り道、悪=災悪の考え方の根本的な変化を経由する長大な回り道を経て、西洋は、良きにつけ悪しきにつけ日本人の魂に書き込まれた太古からの特徴を見いだすことに成功したのかもしれない。

(訳：増田 一夫)

-
- i Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, 1762. (*Émile. Éducation, morale, botanique. Œuvres complètes IV*, Paris, Gallimard, coll. de la Pléiade, 1962, p.588. 『エミール (中)』今野一雄訳、岩波文庫、1963年、154頁)
- ii “The Man-Made Disaster”, *New York Times*, September 2, 2005.
- iii Günther Anders, *Der Mann auf der Brücke. Tagebuch aus Hiroshima und Nagasaki*, C.H. Beck'sche verlagsbuchhandlung, München, 1959. (『橋の上の男』篠原正瑛訳、朝日新聞社、1960年、111頁) ただし、講演原稿のフランス語に近い形に翻訳した。
- iv Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil*, Revised and enlarged edition, New York, Penguin Books, 1977, p.277. (『イェルサレムのアイヒマン』大久保和郎訳、みすず書房、1969年、221頁。
- v Hannah Arendt, *op. cit.*, p.277. (前掲書、213頁。ただし、引用された言葉は *The Eichman Trial and the Rule of Law* (Center for the Study of Democratic Institutions, 1961)の著者 Yosal Rogat によるものである。)
- vi 「神聖」という形容は不適當に思われるかもしれない。デュピュイが参照するアンダースは、想像を絶するような残虐行為の犠牲者となった人々、そしてその人々の眠る土地が聖なるものとなる現象を引き合いに出し、残虐と神聖の相互関係もしくは反転関係を論じている。
- vii Günther Anders, *op. cit.* (『橋の上の男』、116頁) この箇所も講演原稿を尊重して翻訳した。
- viii Dillwyn Williams, Keith Baberstock, “Too Soon for a Final Diagnosis”, in *Nature*, no. 440, April 2006, p.993-994.
- ix 砂山のパラドクスとも言われる。その場合は、「砂がひとつあっても砂山とはならない。また、それに砂をもう一粒加えてもやはり砂山とはならない。したがって、砂粒を集めても砂山を作ることにはできない」というもの。砂山から砂粒を除いていく方向でも機能する。砂粒がいくつ集まれば砂山ができるかという量的規定が明確ではないために生じるパラドクス。